

平成26年度椿研究会（接ぎ木）報告

事務局 小泉不二男

8月の終わりに連日の猛暑が突然途絶え、残暑が戻ることもなく涼しさが2週間余り続いた9月14日（日）、13名の会員が集まって椿研究会が開かれました。

会場の新治公民館は、この冬に椿の市民講座を受け持ったご縁で6月の幹事会に引き続いて利用させていただきました。広い敷地には見上げるばかりのユーカリの巨木が、枝垂れ柳のようなその枝を高い空でゆったりと秋風に流していました。

会場の研修室に入るとこの時期にもかかわらずツバキの花がありました。講師の中村茂さんが持参されたユキツバキの原種が一輪。もとは中山徹さんが新潟県小国町の山林で群生していたユキツバキを1本持ち帰ったものとのこと。「今、咲くの？」と参加者一同覗き込む。もう1つは、ベアトリスエミリー。いつもこの時期に咲き出すということです。まず咲き出すのは炉開きか西王母と決めている向きには意外な一輪でした。

それやこれやで先月の挿し木講習会以来の会合で、賑やかな椿雑談がしているうちに開会時刻の午前10時になりました。

今回の講師は、中村茂さん、テーマはビン接ぎです。

中村さんはつくば市の中心部にお住まいです。街中の限られたスペースで広い庭がなくても多くの品種を育て楽しむ方法として、1本の木に数品種のツバキを接ぎ木して育てています。これにより椿展で多くの品種を出品されているのです。またこの方法だと鉢植えの水やりの煩わしさがなくなり、特に「夏場が楽になった」とのことでした。

参加者は気心の知れた会員同士で和気あいあいの雰囲気の中、漏れ聞く「中村流接ぎ木」をしっかりと学ぼうとメモする方も多くいて「真剣」な空気を感じられました。



研究会風景



6月接ぎ木
「初黄」が着蕾



脇芽に接ぎ木
(割接ぎ)

講演の要点としては

- ・接ぎ木の時期は、新梢が固まった（木化）した直後の梅雨時
- ・穂木の葉は多くても3枚以内
- ・地植えのツバキにビン接ぎする際は、日の当たる側が葉の表側になるようにする。台木に穂木を当てて葉の向きを調整してから台木との接着面を削る。
- ・台木は学校用の彫刻刀で穂木との接着面を削る。
- ・接ぎ木テープで固定する際、隙間から水が入らないようテープを台木に巻く。その上から接ぎ木用のロウを塗る。
- ・ビンは健康飲料用ポリ容器を利用する。雨水が入ると水が腐るのでアルミのフタは少し開けて穂木を入れ、その後アルミフタで密閉する。
- ・密閉が不完全だとナメクジが容器内に入り込み、水が腐って失敗する。同じく密閉が不完全だと毛細管現象なのか穂木の表面を水が上昇して伝わり容器の外に出てしまい水がなくなる。
- ・水の汚れや腐敗は10日に一度程度チェックする。汚れに気づいたら直ちに水を交換する。通常は水の交換は1ヶ月に1回。
- ・ビン接ぎしている期間は3ヶ月。その後ビンを取り外す。失敗していれば接ぎ穂は枯れる。春に接ぎ木した場合、新芽が出てくることもある。
- ・ビン接ぎではないが、台木から新芽が出た場合に、これに割接ぎできる。いわゆる新芽接ぎ。
- ・長い期間がたつと穂木から根が出てくることがある。このような場合、接ぎ木は失敗している。

講演後に染谷治正さんから参加者全員に接ぎ木用の台木がプレゼントされました。今日のために椿畑から掘って来てくれたものです。また中村さんからは穂木として「石鎚」「新世紀」「越の麗人」および神戸カメラアの協力で届いた数種類の洋種椿の穂木を参加者に配りました。

終了後はその場で早生栗の甘煮でお茶とコーヒーをたっぷり飲んで、いつもの如く椿の話が尽きませんでした。

《後日談》

中村茂さん宅訪問記

次の日は敬老の日で勤めは休みなので、忘れぬうちにと朝から報告文を書き始めたところ、不明な点を確認する必要がありますが出てきました。中村茂さんに電話すると実際に接ぎ木された椿の木を見た方が良いということになり、お招きに甘えて急遽中村さん宅を訪問することになりました。

竜ヶ崎からは約40分、かつて通勤した道でつくば市春日に向かうとそこは

大学病院近くの静かな住宅街。昨日の挨拶もそこそこにさっそく見せていただくと、庭には手入れの行き届いた地植えと鉢植え椿が所狭しとあり、そのツヤツヤした葉で庭が秋の陽に輝いているように見えました。



台木は勘次郎（立性）（中村さん）



この夏の接ぎ木



多くの枝に接ぎ木



新世紀（茨城つばきの会椿展：中村さん出品）

事前に聞いていたように庭植えの椿の多くは、接ぎ木されていました。1本の椿に10本以上、多いものだと20本近く接ぎ木がされていました。3～4mくらいで枝々に接ぎ木された椿が5本以上ありました。台木となっている元木は、もともと庭にあった勘次郎（立性）が多いとのことでした。

驚いたのは、黄色椿の「新世紀」が接ぎ木で枝を広げていたことでした。初めて見たのは、つくば市で開かれた安達流2代目家元を迎えての花展で中村さんが協賛出品されたものでした。葉がなかったので当初はバラと見間違えてしまうほど椿にない花色でした。その後幾度も椿展に出品されて多くの見学者を魅了してきました。

戸外で越冬できないはずの黄色椿の一つが接ぎ木で大きく枝を伸ばし、展示会に何度も出品されてきたことを、幾度も目にしていながら不覚にも考え及びませんでした。さらに同じような黄色椿の「黄の旋律」「初黄」も接ぎ木されて

いました。なかでも初黄は黄色椿の中でもっとも丈夫で耐寒力もその中では一番とのことでした。

茨城つばきの会では、5年後の平成31年の椿展のテーマとして「黄色ツバキ」を予定しています。この接ぎ木法も含めてどのような内容の発表ができるか楽しみです。

また、5mほどの「絞り笑顔」にもたくさんの品種が接ぎ木されていました。この木に接ぎ木されたものは、すべて斑入りになっているとのことでした。台木のウイルスが接ぎ木された枝にも入り込んでいるということでしょうか。春曙紅が斑入りになったとのことでしたので、既にある「斑入り春曙紅」と比べてみたいものです。

中村さんが云うにこの接ぎを始めるきっかけは昭和53年の日本テレビ「たのしい園芸」で紹介された金井俊道さんの記事によるとのことでした。金井さんはお菓子製造業のかたわら東京の五反田の自宅3階と4階を椿栽培用とし、特に実生苗を毎年3000から1万粒栽培し、早く開花させるために1本の台木に何本も接ぎ木していると書かれてあります。この記事을参考にして今の接ぎ木を始められたそうです。残念ながら「たのしい園芸」は放送終了しましたが、放送に合わせて発行されていた月刊誌を中村さんは大切に保管されていました。

金井俊道さんについては手持ちの1990年（平成2年）の日本ツバキ協会の会員名簿にお名前が掲載されていました。会誌に発表されたものは見つかりませんでした。このような椿愛好家の先輩がいたことに心強い思いがしました。



平成26年茨城つばきの会 県植物園椿展 中村茂さん出品

ちなみに中村さんが接ぎ木をして育てている品種は、157品種にのぼるそうです。椿展で毎年多くの品種を出品され続けてきたのも頷けます。

たまたま研究会の講師をお引き受けいただいたうえに自宅まで押し掛けたことで接ぎ木の活用法や黄色椿、斑入り椿さらには椿愛好家の先輩のことなど学ぶことの多い訪問となりました。もっと早くにお訪ねすればよかったと少し後悔した一日でした。